

特集「音楽療法」の発刊に際して

高橋 榮明

ここに新潟医療福祉学会誌の第2巻第1号（通算2号）を「音楽療法」の特集としてお届けする。この号は2002年12月7日に開催する国際ミニシンポジウムと同時に刊行予定である。

いま、わが国で「音楽療法」が医療の面からも、社会的にも注目され、強い関心もたれている。従来、精神保健医療そして福祉教育などの分野で、小児、成人そして高齢者を対象として、音楽が治療や実践に使用されてきた。

1995年に日本バイオミュージック学会と臨床音楽療法協会が合併し、全日本音楽療法連盟となり、1996年この連盟の認定音楽療法士制度が出来た。さらに、これは2001年には日本音楽療法学会となって、学会認定音楽療法士制度となった。

新潟県では1992年に新潟音楽療法研究会が組織され、作業療法士、介護福祉士、ピアノ教師、看護師、音楽療法士、学校教諭などの多職種が会員として参加し、年2回の会合が開催されている。

地域リハビリテーションの情報交換のために各職域の横断的組織である新潟地域リハビリテーション懇話会の第3回特別会は1998年12月13日に「音楽療法入門—音楽療法の基礎を学ぶ—」をテーマに開催された。その時、アラン・ウイッテンバーグ先生が特別講師として参加してくださった。そして講演と実技で参加者に大きな感銘を与えた。

新潟ではさらに「音楽と脳」が科学的に取り上げられた。1999年10月15～17日には新潟市市民芸術文化会館で国際シンポジウム「音楽の神経科学1999」—文部省 COE プロジェクト—を新潟大学脳研究所中田 力教授が主催された。ドイツ、フランス、フィンランド、米国、カナダ、オーストリア、スウェーデンなどから多数の研究者が集まり16日、17日には一般公開シンポジウム、市民コンサートも開催された。

このように音楽療法は医療と福祉の分野で、非常に発展が期待されている。今回、特集号を刊行するに当たり、過去20年に渡って米国と日本との間を往復して、日本における音楽療法の発展に大きな貢献をされたアラン・ウイッテンバーグ先生から、米国における音楽療法の状況、先生から見たこの日本における音楽療法の進歩と普及に関する印象をご執筆いただいた。「脳とは？」とのタイトルで、最近の脳科学の進歩について中田力教授から、ご寄稿がいただけた。さらに、特集「舌で見る」ことが出来る可能性について触れておられる。日本音楽療法学会評議員の櫻井浩治教授からは学会が日本においていかに組織されたかについて、ご投稿いただいた。新潟で多年に渡って多数の方々が音楽療法の分野でご活躍されている。その中で松田美穂先生、丸山敬子先生、早川 昭先生がそれぞれの実践に付いてご執筆下さった。

ご多忙中にもかかわらず、これらの方々から本特集へご寄稿いただけたことにより、新潟地域において音楽療法に対する高い関心と興味があること、そしてその着実な活動の内容を知ることが出来た。ご執筆に心から感謝している。これが契機となり、新潟の医療福祉分野における音楽療法の一層発展が切望される。